2009年1月22日

2:45

先週からエウゼビオスという古代の終わりの思想家の話をしている。今回はその人がどんなことを考えたのかをやったが、今回はこの人の思想をどういう風に評価するかを話す。

I カエサリアのエウゼビオス (Eusebios:260?-339?)、その人と思想 (つづき)

A 批判的評価

- 1 教会のプレゼンスの高まりがローマ帝国史と連動
 - ・ コンスタンティヌス賛美：大多数のキリスト者も共有
- 2 終末意識の契機、その極小化 →政治権力批判の視点が弱くなる。

B エウゼビオス批判の問題点 (コンスタンティヌス体制確立後の歴史から)

- 1 政治権力によるキリスト教公認を墮落と見る人々
 - 砂漠へ(修道院制のはじまり)
- 2 問題
 - a 聖書宗教のもう一つの契機
 - : 共同性の契機(内面の問題に収斂しない宗教)の視点から
 - 聖書宗教の伝統の純化は必ずしも「非政治」に帰結しない。
 - b 「主観的な」宗教の(「点」的)純化運動
 - (「線」的であることが要求される) 歴史や文化と宗教はどうかかわりあうのか?
 - 初期キリスト教会の危機 (→アウグスティヌスへ)

従来何より問題とされてきたのは、エウゼビオスが歴史におけるキリスト教会のプレゼンスの高まりをローマ帝国の政治の歴史と結びつけて理解したことである。とくにキリスト教会の栄光迫害を堪え忍んで公認されるに至った教会の栄光物語を、世俗の政治家であるコンスタンティヌスの功績に直接結びつけて考えた。このことはけしからんじやないかという見解がずいぶんなされてきた。エウゼビオスだけが当時政治権力に媚びへつらったわけではない。多くのクリスチャン達が、今やキリスト教公認に政策を転換したコンスタンティヌスに感謝を表明している。またコンスタンティヌスの政策転換に神の摂理を感じている。そしてそのコンスタンティヌスに対してクリスチャン達が感謝をしている。こういう事例はたくさんあった。その意味ではエウゼビオスは当時の一般的なクリスチャンの気持ちを代弁していたといえなくもない。しかしそれでもやはり、原理的にいっても、エウゼビオスの思想・神学には問題とすべき点があったのは確かである。

今原理的にといったが、この授業全体の視点から言い直すなら、聖書宗教の伝統における「終末意識の契機」がエウゼビオスの神学においては極小化している。このことが深刻な問題を生じさせている。というより、終末意識が極小化する、そうなった場合、キリスト教の神学はいかなる政治思想的な帰結を引き出しかねないか。その代表的な事例をいまエウゼビオスを見て取っているのかもかもしれない。終末意識の契機とは、私たちが圧倒的なリアリティを感じずにはいられない歴史、そしてその歴史上で起こる出来事というものも初戦は終わるものだという意識である。その上で例えば、歴史のリアリティも最終的には克服される。神が設定した歴史本来の目的に適用形で完成させられる。このように聖書に由来する終末意識というのは歴史の彼方に、喜びに満ちているはずの歴史の彼方に人々の目を向けさせようとする機能を有していた。しかるに、エウゼビオスにおいては、今言っている歴史の終わりにおいて出現する者に対して目配りが聞かない。歴史の彼方に出現する喜ばしい世界と宇宙の完成ということに対してエウゼビオスはセンサーが働かない。もちろんその理由は我々が共感できないものではない。例えば皇帝によるキリスト教の公認は当時のキリスト者にしてみれば夢のような出来事である。この夢のような歴史のリアリティにエウゼビオスは目を奪われていると言っていい。結果、エウゼビオスは今この時というのを大事にしようとする。そしてそれを自分たちにもたらしてくれたコンスタンティヌスを讃えようとしている。なんだかんだいっても、現世を圧倒的に秩序づけているのは政治権力である。しかし、そういう政治権力であってさえも、特に終末意識のある宗教というものは、時として対象化してそれを批判的に見つめることが出来る。ところがさっき言った理由で、エウゼビオスにおいてはそういう思考が働かない。そしてこのことをエウゼビオスの一番の問題だという指摘はずっとあったわけである。

けれども、次に考えたいのは今まで言ってきたようなエウゼビオス批判の妥当性という問題である。実はある意味でエウゼビオスを批判するということが簡単である。しかし、エウゼビオス批判それ自体の危うさというものもあるかもしれない。これをエウゼビオスと同時代に起こったエピソードを用いて考えてみたい。実はエウゼビオスに見られるような、キリスト教神学というものが批判的な機能を弱めて自分たちの教会のあり

方を養護してくれる政治権力者にべったりになって、というのはおかしいのではないのか。という指摘はすでにエウゼビオスと同時代からあった。

それは公認後の有力者による教会の寄付が増大したことや、公認後の聖職者の服装がきらびやかになったり、また迫害時代に転んだヤツが公認後に自分が聖職者だということでふんずりかえているという状況だった。こういう現状は本当に教会の勝利を見なして良いのだろうか。そういう異議申立が公認後まもなくなされるようになった。そしてそういう異議申立をする人からすれば、エウゼビオスだったら教会の歴史の栄光を見なすものを、教会の歴史の墮落・恥辱という風に見つめることになるのである。そしてこういう異議申立をする人たちは次に何をするか。きらびやかになっていく教会堂に別れを告げ、砂漠に向かって行く。そして砂漠という過酷な自然環境の中で、彼らは自分自身と神に向き合おうとする。また、そういう質素な信仰生活をしてみたいという人たちがたくさん出てきて、共同生活を始めた。いわゆる修道院制の始まりである。こういう修道院制の始まりは迫害時代ではなく、公認時代にかえて本格化したのであった。

けれどもここから色んな批判的なことを考えてみたい。

確かにエウゼビオスにおいては終末意識の契機は極小化した。その結果、権力批判の視点が弱まり、また皇帝教皇主義を導くようなイデオロギーが生まれた。これを政治に対する宗教の墮落というのは簡単である。けれども、こういったことへの反発として生まれた修道院制度というものは、聖書宗教の伝統、ユダヤキリスト教の伝統からして、100%正当性を付与されるようなアイデアなのだろうか。聖書の宗教においては人間の共同性という契機が強調されていた。これは例えば宗教で関わることであっても、一個人の内面の問題に限定しようとする契機であった。誰にでもアクセス可能なのが聖書のメッセージだからこそ、そういうメッセージを受けたものにはすぐに公的な正義という問題に関心を寄せるはずだ、という理念がこの酒興にはもう一つ原点としてあったのだ。つまり、ユダヤキリスト教の伝統、聖書の伝統というのはそれが突き詰められたときに、必ずしも非政治・反政治になるわけではないということである。その意味では、現実政治との関わり合いから目をそらさなかったエウゼビオスという人は必ずしも聖書宗教の逸脱者であるとはいえない。また、逆にこの聖書宗教の「純粋化」を目指して砂漠へ向かっていった人たちも必ずしも彼らは聖書宗教の正当な後継者であるとはいえない。

修道院制度というアイデアだが、それは宗教が体制迎合することで客観的に墮落していつている。そのことに対する憤りに由来している。そして主観的に純粋化された宗教のあり方を目指そうとする、このことにも修道院制度は由来していた。この時支配的な動機があるとすれば、それは周囲が汚いからこそ、自分は綺麗でありたいということが修道院制度を築く人々の支配的な動機であっただろう。

果たして宗教というものは主観的に純粋化されることだけを理想とすべきなのか。主観的に純粋化された宗教という理念自体が引き起こす問題もあるのではないだろうか。エウゼビオス以後の体制化してしまったキリスト教会を揺さぶったのは、宗教の墮落それ自体ではない。むしろかえって始末が悪いのは、それ自体極めて真面目な宗教理念や宗教運動であり、それによってかえって宗教は大きく揺さぶられる。真面目な宗教理念がかえって宗教そのものを揺さぶる。言い換えると主観的な純粋主義が過度に強調される結果、神を受け止める自分自身に神とのチャネリングが限定されてしまう。こういう事態が問題を生む。神などの絶対的なものの意志というものがこの現世においては、自分・自己といったほとんど点に例えられるような存在でしかない自己で持ってしか神を受け止められない。そういう事態がやはり宗教にとっては致命傷になるのである。こういう図式では宗教信仰は文化や歴史などに関わっていけなくなるのである。そういう深刻な問題が生じるのである。何故関わっていけないのか。それは文化や歴史は継続性を持った時間を前提とするからである。要するに宗教というものがこの信仰者の真面目な信仰によって限りなく断片化されていく。そのことが古代末期のキリスト教会の危機を招いていた。この危機は何らかの解決を必要としていて、この危機を救うのがアウグスティヌスである。

II アウグスティヌス (Aurelius Augustinus: 354-430)

A その人と時代

- 1 北アフリカのヌミディア出身～マニ教の影響～ローマ&ミラノにおける修辞学修行
- 2 ミラノ司教アンブロシウスによる回心 (アンブロシウスのテオドシウス帝叱責)
- 3 北アフリカ、ヒッポの司教 (→ドナトゥス主義—主観主義的な純粋派—と直面)
- 4 時代背景: 361 ユリアヌス帝即位、異教の復興/375 西ゴート族の東ローマ侵入、民族大移動の開始/380 テオドシウス帝、キリスト教を国教化/429 ヴァンダル族の北アフリカ支配

B 教父神学のチャンピオンとして

- 1 教父: キリストの愛弟子(ペテロやヨハネ)以後、教会において正統的(オーソドックス)な教理を論理化し、徳の高い生活を送った著作家たち(～7C.前)
⇔スコラ哲学

II アウグスティヌス(Aurelius Augustinus:354-430)

A その人と時代

- 1 北アフリカのヌミディア出身～マニ教の影響～ローマ&ミラノにおける修辞学修行
- 2 ミラノ司教アンブロシウスによる回心(アンブロシウスのテオドシウス帝叱責)
- 3 北アフリカ、ヒッポの司教(→ドナトゥス主義—主観主義的な純粹派—と直面)
- 4 時代背景:361 ユリアヌス帝即位、異教の復興/375 西ゴート族の東ローマ侵入、民族大移動の開始/380 テオドシウス帝、キリスト教を国教化/429 ヴァンダル族の北アフリカ支配

B 教父神学のチャンピオンとして

- 1 教父:キリストの愛弟子(ペテロやヨハネ)以後、教会において正統的(オーソドックス)な教理を論理化し、徳の高い生活を送った作家たち(～7C.前)
⇔スコラ哲学
- 2 アウグスティヌスの貢献:カトリシズムの確立
 - a ローマ=カトリック教会の教理をパウロの路線で方向付け
 - b 例)救済論:罪人たる人間の救済は神の一方的な恵み(=恩寵)に由来
→(救済の)客観主義

彼についてやる。彼は青年時代にマニ教にはまっている。マニ教というのはペルシャに由来する当時の新興宗教である。その特徴は善悪二元論である。つまり光と暗黒の永遠の対立・闘争という世界の観点からものを見ている。善・光に徹しきる道徳を人々に説いて回っていた宗教である。ミラノで司教のアンブロシウスにであって、彼に導かれてマニ教を捨ててキリスト教に回心した。このアンブロシウス、政治思想的にも興味深い人物である。彼は一言で言うと世俗権力に対する教会の優位を主張した神学者として捉えられることもある人物である。この時の皇帝はテオドシウス帝である。彼はキリスト教を国教化した人物である。参考までに。

アウグスティヌスは396年に故郷に戻りヒッポという町の司教となった。ところで、アウグスティヌスが北アフリカで活躍したということに意義を感じる。当時北アフリカのキリスト教会は、ローマを中心とした教会と色んな点でぎくしゃくした関係にあった。アウグスティヌスが司教になったときにも、当時北アフリカではドナトゥス派・ドナトゥス主義という運動であった。ではこれはどういう立場なのか。一言で言うと迫害時代に転んだことのある聖職者が行う宗教儀式は無効だとする純粹派の立場である。結果、このドナトゥス派においては教会とローマ帝国は無関係であるし、無関係に徹するべきだという主張が出てくる。で、このドナトゥス主義との対決というものがアウグスティヌスの政治思想に大きな影響を与えただろうというのが次回のお話。

時代背景から見れば、宗教面に限って言えば、コンスタンティヌスのキリスト教の公認、それに対する異教復興・再迫害、そしてテオドシウス帝による国教化、というように非常に流動化した時代であった。また政治面で言っても、ゲルマン民族の大移動に直面してはいよいよローマが急激に衰退していく、そういう時期に生まれたのがアウグスティヌスであった。なので彼は宗教と政治の激動の時代に生きた人物であり、また変動期に出てくる問題に対する対決を余儀なくされた人物である。

そういうアウグスティヌスを思想史の上でどう位置づけたいのだろうか。便利なキーワードは「教父」である。教父の定義は、キリストの愛弟子以後、教会において政党的な教理を論理化し、徳の高い生活を送った作家達というものである。アウグスティヌスはこの教父のチャンピオンであると目されることが多い。どういう意味でチャンピオンなのか。その答えを、カトリシズムを確立したが故にアウグスティヌスは教父のチャンピオンだという説明をして行く。そこでカトリシズムの確立とはどういうことなのか。つまりアウグスティヌスは、成立期にあったローマカトリック教会の教理を方向付けた人物である。どういう形で方向付けたかという点、パウロの思想というラインでローマ教会の教えの内容を方向付けた。これがカトリシズムの確立である。ではキリスト教の教理をパウロの路線で方向付けるとどういふことがいえるのか。キリスト教の教理の中に救済論という分野がある。人間の救いを聖書に基づいてどのように理解すべきかというトピックである。これに対してアウグスティヌスは、罪人である人間の救いは神の一方的な恵み、恩寵に由来すると定式化した。言い換えると、人間の側の主観的な努力で人は救われるのではないということである。救済というのは神の側からの一方的かつ客観的なイニシアチブによるのだ、という救いの客観主義をアウグスティヌスは説いて、その方向で今後カトリック教会の救いの問題を解決していった。この客観主義に基づいた教会の見方・考え方が、ひいては人々の政治の見方に一大変革を引き起こしていく。それは来週。